

東田機工株式会社

HIGASHIDA



顧客を優位に導く 機械メーカー



今回、取材したのは最新のローリングマシン（ネジ転造盤）を開発し、国内トップシェアを占める東田機工株式会社である。経済産業省では、中小企業の存在が、国際競争力のある日本の製造業を支え、富をもたらしているとともに、地域の雇用の創出や地域経済の活性化に大きく貢献しているとして、「明日の日本を支える元気なモノ作り中小企業 300 社」を選定した。その中に選ばれた東田機工の、10 人規模でありながら、世界と勝負している会社の秘密に迫った。

会社の成り立ち

東田機工ではねじ自体を作っているのではなく、ねじのねじ穴部分を転造加工という組成加工また削るのではなく型を押し付け、転がし（ねじを）加工する機械を作っている。「第一東田」「第二東田」の社名を入れたオリジナル製品だけを作る機械メーカーである。大正11年に、現東田機工の代表取締役である東田勇人さんの祖父、東田岩吉さんが創業

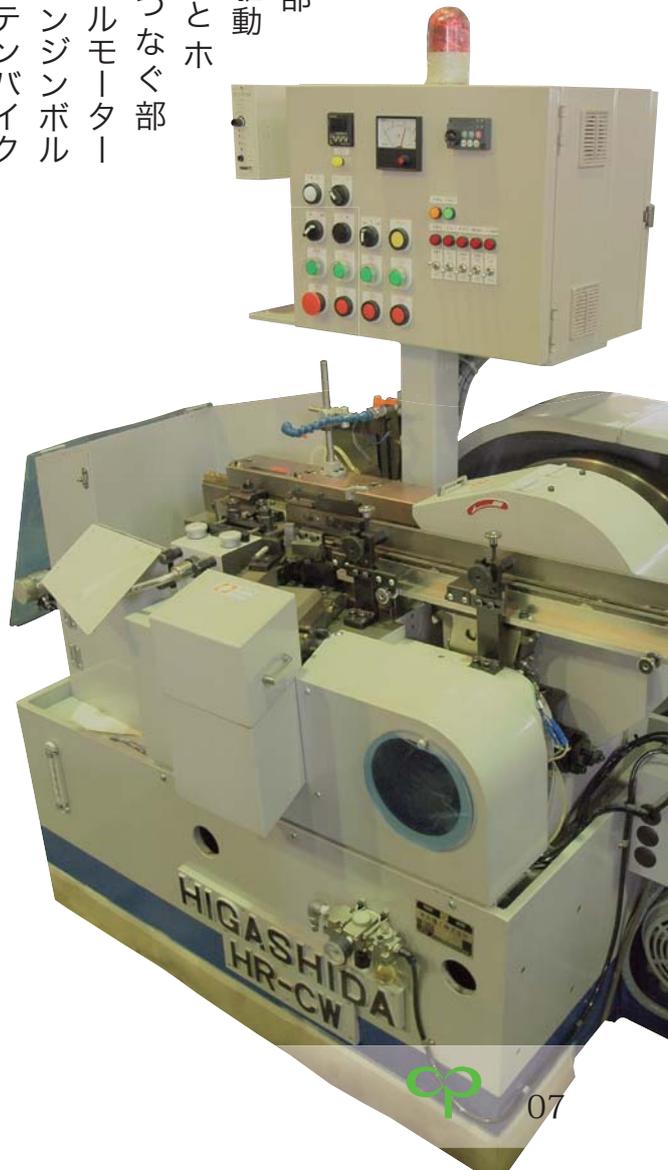


し、機械製作を行っていた。昭和二十年に戦争が終戦となり、戦争の焼け野原を復興するためにねじやクギが必要だということで、ネジを加工する機械（平ダイス式転造盤）を作り始めた。以後六十年間改良を重ね、現在は平ダイス式ローリングマシンを製造するまでに至っている。一般産業用ネジはもちろんのことTや精密電子機器から自動車のエンジン用精密ネジの他、溝入りピンや軸などの特殊形状パーツの高精度フォームローリングまで対応可能なクラス最高レベルの精度・耐久性・操作性を備えたローリングマシンを、用途に応じて提供している。実際にどのような製品に使われて

いるのかというのと、ハイブリッドカーのエンジン部分、四輪駆動車の車軸とホイールをつなぐ部分、ゼネラルモーター向けのエンジンボルト、マウンテンバイクの変速機、冷蔵庫のコンプレッサーの部品というように多岐に亘る。このクラスの製品が高精度で作れるのは世界で5社もないという。東田機工はそのレベルまで上りつめた。

東田機工の経営スタイル

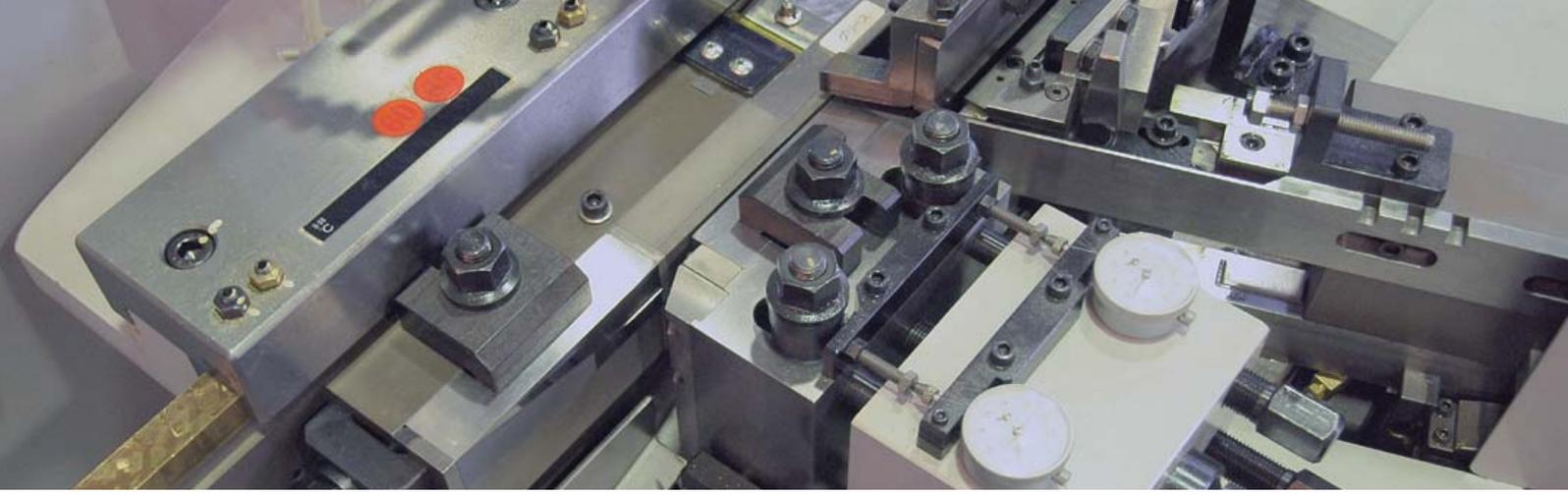
東田機工は、日本部品メーカーの現地生産工場に納入するのがほとんどである。だが、アメリカやオーストラ



リア、シンガポール、タイなどの企業に納入することもあるという。そのような東田機工が納入する企業には一貫性がある。「ものづくりの考え方や方向性を確認し、考え方の合致したお客様に販売したいと思っています。とにかく機械を買って、安いものを適当に作って儲けようと考えているお客様には販売したくはないのです。」そうした東田社長の信

念が反映されている。

東田機工では技術を広める広報活動は行っていない。創業以来、主に口コミと東田社長の直接営業で展開され、現在日本国内で約六百件、海外では約八十件もの納入先が存在する。「送り出した機械の一つ一つが営業マンであり、使って下さったお客様の言葉が営業マンであります。」という社長の言葉には、私自身感銘を受けた。



クラス最高レベル ローリングマシン

顧客が信頼出来る機械を造り続けることはそう容易なことではない。機械の性能・機能そして精度寿命を保証しなければいけない。これについて東田社長は、「失敗の無いよう、知識を増やす為に東大やハーバード大に行けるくらい勉強し、常に緊張感を持って機械を造っています。ダメだった時のことを想像すると怖いですが、スリルがあつて面白いです。」と胸中を語ってくれた。その努力の賜物が、社長自慢のローリングマシンだ。

る。水平と垂直の組み合わせにすることで高精度な製品が出来る。二つ目は、これも精度を上げる工夫であるが、スライド部の『キサゲ』技術である。これにより、微細な油留まりを形成し、抵抗の低減、温度上昇の抑制、摩耗率の低下、精度の維持を達成している。三つ目として、この高精度を生かすための高剛性。炭素含有率をアップさせるなど、従来品よりも強靭さを増している。四つ目は、お客様が管理しやすいシステム。目盛やダイヤルゲージにより、わかりやすく操作しやすい工夫が成されている。

機械加工のレベル を超えた最終精度

東田機工では、人の手、つまり社員が重要

である。それは東田機工で造られる機械の部品が、超多品種少量生産であることに起因する。プログラミングして大量に造るという過程を踏むのが一般的であるが、東田機工のようになり、2個だけ造るとなると人の手で造った方が早い。だからこそ、人材選びに妥協はない。社長が厳選するポイントを教えてください。「機械加工のレベルを超えた最終精度を保証するためには、造り手がミスをしないことです。つまり、注意力、失敗の予知力というのは絶対に必要になります。これは、できる人とできない人がいます。ですから、人間力を見て社員を選んできました。」

厳選するだけではなく、採用してからの人材育成も工夫を凝らし

ている。社員に対し、『トレーニングが足りないのか』『勉強不足なのか』『手先が不器用なのか』等を見抜いて、個々に合ったアドバイスをする。それだけではない。社員の心持ちまで指導している。「当社は職場だとは思わないで欲しいと社員に言っており、極端に言えば、禅寺や修行に近いです。人は体調や家庭に問題があつたりすると注意力が落ちます。工場から出て行くときには完璧なマシンにするため、普段の仕事の中でそれをチェックしています。」人が入れ替わっても技術が廃れることなく続けて来られたのは、独自の育成方法が確立しているからである。東田機工の高精度は、人が作り上げたものであった。

顧客驚嘆！！

社長は、自らの会社を『武器商人』と表現している。お客様がレースに勝つためのマシンとノウハウ、サポートを供給する企業であるという位置付けを経営理念としているからである。顧客を競争優位に導く機械と技術の開発と提供。そして気持ち良く購入でき、安心して使うことができる接客、品質によってより高い顧客満足を目指している。さらに東田機工は顧客満足だけでなく、「あの機械でこんなことができるの？」という顧客驚嘆を感じてもらいたいという。そのように常に上を目指す東田機工だからこそ、現在までたくさんの方々の支援も受けている。大正11年創業以来オイル

ショック、バブルの崩壊そしてリーマン

ショックと時代が変化し、顧客のニーズも変化の中で会社が存続できたのは、初代から続く周囲の協力あつてのことと社長は語る。より良いものをより安く、最新の情報を提供するサプライヤー、銀行の支援。さらに経済産業省の『明日の日本を支える元気な中小企業300社』や『大阪の元気ものづくり企業』で選ばれたこと、これらについて社長は「有難いことに祖父の時代から本当に周りの人のお引き立てに支えられてきました。今後一層企業としての高いレベル、社会での高い優位性を目指し、社会で値打ちのある企業になりたいと思っています。」と話す。

「じんざい」とい

う四つの言葉

一番上は「人財」。「ざい」は財産の「財」。国の宝であり、製造業の宝であり、地域の宝である。その次は「人材」。磨けば光るけれどもまだまだこれから。上昇の余地があり、頑張れば「人財」になるが、気を抜いたり、気分が腐ると下のランクに落ちる。その下のランクとは存在の「在」。「人在」人が存在するだけ。ものの数にはなるが、社会を引っ張る力はなく、新たなものを生み出すとは思えない。そこから、さらに落ちると「罪」になる。「人罪」これは社会を腐らせる。企業を腐らせる。家族を腐らせる。以上のように四つの意味で捉えることが出来る「じんざい」の話は聞くことが出来た。自分



を四つのどこに持っていくか、さらに周りをもどきまで引っ張っていかけるかというのも人の値打ちであるのだ。私たちに「自分だけ良ければいい。」というのではなく、「周りの人ではどうか。」というのをどう考えるか。ということを考え、周りを良くする起爆剤になって欲しいというメッセージを手渡してくれました。そして「男は人生

のうちほとんどを仕事に費やす、そこで良い仕事をして、歴史に残る仕事、小さな歴史だが、ねじを作るとか。その部品の機械を作っているという、自分で満足いく歴史を作りたいと思っています。」と社長はインタビュアの最後を締め括った。

(山口 はるか)
(正野 理沙)